

音楽部会

音楽的な見方・考え方を働かせながら主体的・対話的に学ぶ音楽科教育

～教材提示と可視化の工夫を通して～

砂取小学校 教諭 右田 晴久 東野中学校 教諭 林 秀一

中島小学校 教諭 渡辺 祐子

要 約

音楽科の目標は、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成していくことである。本研究では、音楽的な見方・考え方を働かせ主体的・対話的に学ぶことで、生活や社会の中の音や音楽(音楽文化)と豊かに関わる資質・能力が育成されていくと考えた。【()は中学校表記】研究の結果、教材提示と可視化の工夫改善を行った授業実践が、音楽的な見方・考え方を働かせることになり、主体的・対話的な学びを生み出し、深い学びへつながる可能性を示唆するものとなった。

1 主題設定の理由

新学習指導要領には、「音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実を図る」と述べられている。

事前アンケートの分析から、児童生徒が社会生活における音楽の働きについて実感していく機会は少ないことが明らかになった。そこで、生活の中にあふれている視覚情報と音楽との関わりを考えさせることや、身近な音楽を教材として使うことや、自分以外の考え方に触れる対話活動や思考の活性化のための可視化を進めることなどが、音楽的な見方・考え方をより働かせ、生活や社会と音楽との関わりをより深く学ぶことができるのではないかと考えた。

ここに示す音楽的な見方・考え方とは、児童生徒が音楽を形づくっている要素とその働きを捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けていく視点や考え方のことである。教材提示の仕方を工夫し、興味・関心を高め、さらに発問に対する思考過程や音楽の特徴、諸要素の働きなどを可視化していくことで音楽を解釈し、批評していく学習は深まっていく。このことは音楽科の特質に応じた、物事を捉える視点や考え方であり、音楽科を学ぶ本質となる。

教材提示の仕方を工夫し、音楽を可視化することで、主体的に対話活動や思考をする子どもを育成す

る。それにより、義務教育を終えた後も音楽的な見方・考え方を働かせながら生活や社会の中の音や音楽(音楽文化)と豊かに関わる人を育てることができると考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説

教材提示と可視化の工夫によって主体的・対話的な学習が可能になり、音楽的な見方・考え方を働かせて生活や社会と音楽との関わりについて考えを深めていく能力が高まるだろう。

(1) 教材提示の工夫とは

学習の中でどのように音楽と出合わせるか、教材提示が学習意欲や対話活動に大きく影響する。効果的な教材提示が、興味・関心を高め、その後の主体的な学びにつながっていく。本研究では学習内容の提示方法を、生活や社会の中の音や音楽の働きと関わらせることを意識した。検証授業の中では、以下のように提示した。

①絵と音楽の融合

②身近なCM音楽やわらべ歌を教材として使用

(2) 可視化の工夫とは

対話活動では、自分の考えを明らかにするだけではなく、他の考えとの相違点を明らかにしながら考えを深めていくことができる。自分の考えをさらに説得力あるものにするためには主張する際、その根

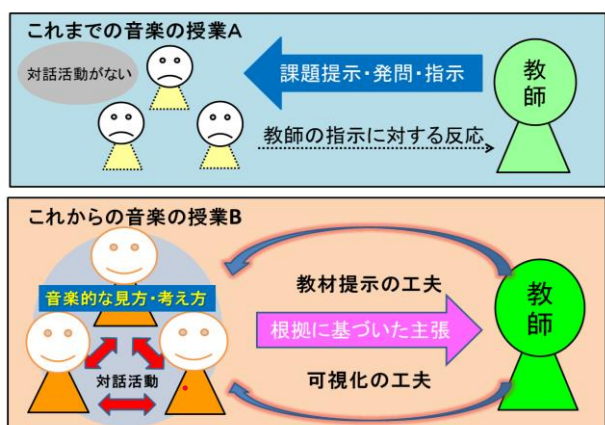
拠を明らかにさせたい。音楽は消えていくので、根拠を示しながらの主張がしにくい。そこで、音楽の根拠を明らかにするため、可視化の改善を行った。楽譜や記号のほかに、思考をしやすくする可視化のツールとして、以下のものを使用した。

- ①自分が主張する楽節を明らかにする表示
- ②音楽の要素や部分に対応する、図や色を使用した板書の工夫
- ③図形楽譜の使用

3 研究の視点

- (1) 生活と音楽との関わりを意識した教材提示の工夫
- (2) 音楽的な見方・考え方を共有するための可視化の工夫

4 研究の構想図



5 研究の実際

(1) 検証授業 1

題材名「絵と音楽」(中学校3年 鑑賞)
教材「六段の調」「湖上の月」「紅白梅図屏風」

(視点1) 生活と音楽との関わりを意識した教材提示の工夫

現代社会における音楽は、映画やテレビの中で見受けられるように、常に音楽と視覚情報が相互に影響しあいながら全体の印象を作り出している。このような生活環境の生徒たちに音楽だけではなく、視覚情報を与えることが、より学びの深まりにつなが

ると考え、授業を構成した。本授業では、美術科教材の「紅白梅図屏風」と、邦楽曲「六段の調」「湖上の月」を同時に提示する工夫を施し、美術科との教科横断的な授業を行った。発問は「どちらの音楽が絵の世界観にふさわしいか」である。生徒たちは、視覚的な要素の屏風図と、尺八と箏の異なる音楽の要素を相互作用させ、鑑賞を深めていった。音色、旋律、速度を根拠に、美術の共通事項ともリンクさせながら、自分の意見を両方面の印象をもとに主張を行っていた。視覚情報を与えることで、音楽の特徴をより具体的に捉える手がかりのひとつとした。



図1 授業の様子

(視点2) 音楽的な見方・考え方を共有するための可視化の工夫

板書には「音色」「旋律」「速度」の〔共通事項〕を示し、思考の手がかりとなるようにした。絵と音楽の特徴を捉えた板書の工夫をすることで、思考の流れを音楽・美術の双方向へ働かせ、何をもとに根拠を求め、主張すればよいのかを分かりやすくした。この板書をもとに自他の考えの相違点を明らかにしながら、自分の考えを深めていく手立てとした。

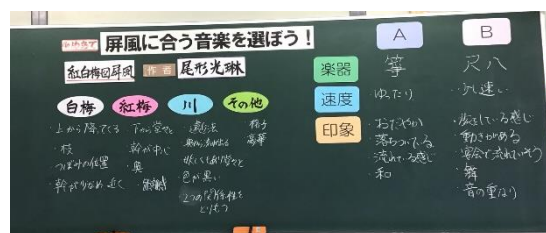


図2 板書の様子

〈検証授業1の考察〉

現代社会における音楽の在り方を踏まえ、音楽のみの鑑賞ではなく、視覚情報を与えることでより具体的に音楽を感じ取らせることができた。音楽が変わると絵のイメージも変わる、という現代社会ならではの音楽の位置づけについても考えを進め、音楽

的な見方・考え方を働かせた授業展開となった。

(2) 検証授業 2

題材名 「いろいろな音のひびきを味わおう」
教材 リズムを選んでアンサンブル
(小学校5年 音楽づくり)
教材 「Paradise Has No Border」

(視点1) 生活と音楽との関わりを意識した教材提示の工夫

CMでおなじみの「Paradise Has No Border」を教材化した。常時活動で、子どもたちは6つのリズムパターンを入れたリズム遊びを繰り返し行ってきた。その上で「Paradise Has No Border」を聴いた子どもたちは、CM曲の中に6つのリズムパターンが「反復」されたり、「呼びかけとこたえ」の形になっていたりすることに気づき、その効果について考えを深めることができた。同時に〔共通事項〕の「音色」「リズム」「拍」などを意識することでさらに自分たちで考えたリズムを創作する意欲を高めることへつながることができた。子どもたちの生活の中にある身近な音楽を使用し、分析を進めたことで、子どもたちの興味・関心が高まり、学習への主体的な参加が見られた。

(視点2) 音楽的な見方・考え方を共有するための可視化の工夫

教科書の例を参考に、重ね方や反復の仕方を工夫し、リズムアンサンブルを創作する授業を行った。リズムパターンを○△□の記号を用いて図形楽譜に表すことで(図3、4)、〔共通事項〕の「反復」や「呼びかけとこたえ」などがより明確となり、活発な対話活動につながった。しかし、単に「反復」だけの作品などで終わってしまうグループが多くなってしまったので、図形楽譜を用いて、さらに工夫した表現ができるように手立てを行った。具体例を示すと、当初Jグループはリズムアンサンブルを図3のようにつくっていた。ここでは、単に○△□のカードを並べ、〔共通事項〕を取り入れているだけの作品にすぎず、作品としてのオリジナリティが不足したきらいがある。

図形楽譜を使用しながら、作品の展開にストーリー

性(具体例として□○「ねえ、掃除してよ。」△「え、やってるよ。」□○「こっちを手伝って。」△「わかったよ。」…)をもたせることで、対話活動が活性化した。さらに、図4で示すような可視化を行うことで、「反復」「呼びかけとこたえ」などの要素が明確となり、音楽的な見方・考え方を全体で共有できた。

(検証授業2の考察)

名前と楽器	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	演奏方法
田中美晴 打 リズム6	●		●	●	●	●	●		●	●	♪
千田 拓未 水鼓 リズム5	▲	▲		▲		▲			▲	▲	♪
永井 美穂 フルート リズム4	■	■	■		■				■	■	♪

図3 修正前のリズムアンサンブル (Jグループ)

名前と楽器	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目	演奏方法
千田 拓未 水鼓 リズム5	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	♪
永井 美穂 フルート リズム4	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	♪
田中美晴 打 リズム6	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	♪

図4 修正後のリズムアンサンブル (Jグループ)

主たる教材をCM音楽に設定することで、児童の興味・関心を高め、音楽的な見方・考え方を働かせながら授業を展開することができた。また、リズムを可視化することで、意見を共有し合った対話活動が活発となり、思いや意図を反映させた深まりのある作品づくりにつながった。

(3) 検証授業 3

題材名 「日本のうたを楽しもう」
教材 「なべなべそこぬけ」(小学校2年 音楽づくり)

(視点1) 生活と音楽との関わりを意識した教材提示の工夫

子どもたちが日頃からよく遊んでいる「なべなべそこぬけ」を教材化した。「なべなべそこぬけ」の歌に、3つの音(ミソラ)を使い、決まったリズムに当てはめて伴奏のふしをつくる学習である。最初に歌詞の意味を子どもたちに問いかけ、鍋の底に穴があくことから、昔から生活の中で育まれてきたわらべ歌であることを確認した。次に「な・べ・なべポン」という「ヒミツの呪文」を唱えることで、拍の流れを自然と身に付けさせることに取り組んだ。リズムにのせた言葉「ヒミツの呪文」により、子ども

もたちは、ただ単にリズムを捉えるのではなく、私たちの最も身近な存在である言葉によって、拍の流れに乗りながら確実にリズムを打つことができるようになった。このような提示の工夫を行うことで、児童は自分の生活（遊び）とのつながりを感じながら、音楽づくり（伴奏のふしづくり）への興味・関心をより高めることができた。

（視点2）音楽的な見方・考え方を共有するための可視化の工夫

ヒミツの呪文「な・べ・なべポン」を図5のように可視化することで、低学年の児童がわかりやすく伴奏のふしづくり活動へ入る手立てとした。リズムを具体的な視覚情報として可視化することにより、子どもたちは耳だけではなく目で確認しながら、リズムを正確に刻むことができるようになった。

また、すべての児童が容易に演奏しながら音楽づくりに取り組めるように、図6の「お助けアイテム」を用意し、使う音（ミソラ）を可視化した。それにより、自分のイメージに合うふしにするため、何度も試して演奏しながら、伴奏のふしを作り上げることができた。そして作った伴奏のふしを2人でつなげる、音楽を通した対話活動がスムーズにできた。



図5 「ヒミツの呪文」の板書



図6 「お助けアイテム」

〈検証授業3の考察〉

幼少のころから生活の中にある身近なわらべ歌のリズムに別の言葉（ヒミツの呪文）をのせていくことで音楽づくり（伴奏のふしづくり）への興味・関心が高まった。また、「ヒミツの呪文」の可視化や鍵盤ハーモニカにつける「お助けアイテム」によって、音楽的な見方・考え方を働かせながら音楽づくりに

取り組むことができた。

6 研究の成果と課題

（1）成果

①視点1について

○教科横断的な学習による教材提示が、主体的で対話的な学びを創造し、社会生活と音楽との結びつきについて考える手段となることが明らかになった。

○CM曲の中の音楽の要素に、子どもが気づくよう工夫することで学習意欲が高まった。

・休み時間や家庭の中で遊んできたわらべ歌「なべなべそこぬけ」を教材にし、それに伴奏のふしをつけた子どもたちは、その後、つくった伴奏を演奏しながら遊び始めた。生活（遊び）と音楽が結びついたことが明らかとなった。

②視点2について

○〔共通事項〕が可視化されたことで、自分の意見が明らかになり、根拠をもって他者へ伝えることができた。また、他者の意見を聞き、自分自身の意見を深めたり新たな考えに変わったりした。

○リズムパターンを記号（○△□）で示すことで「反復」や「呼びかけとこたえ」が可視化され、演奏する側も聴く側もわかりやすいものとなり、対話活動が活発になった。

○「ヒミツの呪文」の可視化、「お助けアイテム」の活用により、リズムと使う音が明らかとなり、イメージに合う音楽づくりに取り組むことができた。また、それが音楽を通した対話活動にもつながった。

（2）課題

①視点1について

○教材提示の仕方については、検証授業で提示した他にも効果的な方法を追究していく必要がある。

②視点2について

○可視化については、音楽を色や記号で可視化することと、要素の項目をカードで示すこと以外にも、可視化の方法があるのではないかと考える。

7 引用文献・参考文献

文部科学省『小学校・中学校学習指導要領解説音楽編』2017年